会報No. 395

子どもの本 研究会

【私の一冊】

金原　瑞人

長年、いろんな本の書評や紹介を書いてきたので、「わたしの一冊」は何冊もあって、いや、何十冊、何百冊もあって、それは『12歳からの読書案内』（すばる舎）や『10代のためのYAブックガイド150！』（ポプラ社）を読んでもらえればわかってもらえると思う。

じゃあ、自分の訳した本の中から「わたしの一冊」は……と考えると、これもまた難しい。かといって、エッセイ集をあげるのもちょっと恥ずかしい。

そこでふと思いついたのが、日本の古典の翻案だ。いまのところ『仮名手本忠臣蔵』（偕成社）『雨月物語』『怪談牡丹灯籠』『東海道四谷怪談』（岩崎書店）の四冊が出ている。ほぼ毎年一冊の割合だ。これが楽しい。翻訳とはまるで違う面白さがある。

なにしろ、翻案である。翻訳ではないのだ。ということは、自由に手を加えていいのだ。削ってもいいし、付け足してもいいし、設定を変えてもいいし、エンディングを変えてもいい。まあ、好き放題やっていいのだ。ただし、原作の原作らしさはしっかりとどめておかなくてはならない。そうでなければ、その作品を取りあげて翻案する必要がない。

それからもうひとつうれしいのは、翻訳とちがって、自由度が高いぶん、責任が重いということだ。なにしろ、おもしろくするのも、つまらなくするのも、こちらの腕、いや、筆次第なのだから。

そんなわけで、これまでにやった日本の古典翻案四作のなかから、ひとつ……ううん、どれも思い入れがあるのだが……選ぶとしたら、最新刊の『東海道四谷怪談』かな。なぜかというと、原作の出来がいちばん悪くて、そのまま小説にしたら、とても読めない……という代物を見事に（だれもほめてくれないけど）、おもしろい読み物に仕立て上げたからだ（と、だれか、いってほしい）。

今年は三遊亭圓朝の『真景累ヶ淵』を翻案する予定。乞うご期待です！

（作家・翻訳作家）

2016年7月14日（木）特定非営利活動法人　熊本子どもの本の研究会　発

http://www.kodomonohon.com　e-mail:kenkyukai@kodomonohon.com